

10月1日より

速報

脊椎・脊髄センター開設

行岡病院では、本年10月1日に、脊椎・脊髄センターを創設しました。
大阪大学より赴任された湯口貴導医師を中心に、脳神経外科、整形外科が協力して診療を行います。

対象疾患：頸椎症、頸椎椎間板ヘルニア、腰椎椎間板ヘルニア、腰部脊柱管狭窄症、脊髄腫瘍全般、脊髄動静脈奇形、脊髄空洞症（キアリ奇形を含む）

主な治療法：①理学療法全般、②レーザー治療、③内視鏡を用いた最小侵襲手術、④顕微鏡を用いた微少手術

診察日：月曜から金曜日の午前9時から12時まで（外科外来で受け付け）

（土曜日は脳神経外科外来で湯口医師が診察）

担当医：湯口貴導他2名



脳神経外科医 医学博士 湯口貴導

川柳

- あの人いる 行岡が
好きやねん
サービスと
患者さん
知恵しほり
プラスにす
マイナスを
皆の知恵
(高橋看護副学校長)
- 経営努力 試しているよな
改定案
高年齢者
負担増
マイナス改定
(東4階 茶園みどり)
- ほら行岡で
いつもある
笑顔と安心
(学園経理課)
- リハビリで
わいてくる
明日の希望
(読み人知らず)
- 行岡を 盛り上げていく
マンパワー
(ケアマネジャー)
- 今だから 一致団結の
大切さ
(病院医事課 寺前)
- 今こそが 変革すべき
チャンスなり
(読み人知らず)
- あーしんど 点数改正
もういやだ
(病院計算室)
- レセプトで 漏れをなくそう
チェックチェック
雨の日も ペダルも軽く
訪問へ
(必ず採用して下さい！)
(訪問看護ステーション)
- ポリ袋 1枚からの
払い出し
(学園総務 松田)

本年4月から、社会保険診療開始以来始めて診療報酬が減額となりました。
このようなマイナスイメージを吹き飛ばす意味で、診療報酬改定に関する川柳を募集しましたところ多数の応募があり、編集部の独断と専行で「選考」した結果上記の15句を代表として掲載します。
掲載させて頂いた皆様にはビール券や高級日本茶葉を贈呈しました。

編集
後記

ゆきおかニュース「ひこばえ」も6年を経過しました。本誌タイトル横のひこばえの芽も少し成長しました。編集部も新しいスタッフが加わりました。ひこばえの芽だけでなく、内容も成長させたいと考えております。
里崇継（歯科技工科）、比嘉陽子（看護部）、弘嶋和美（検査室）
松田雄二、沼田恵介（事務局）

ひこばえ

Vol.13

—ゆきおかニュース—

行岡病院・行岡学園 広報部 大阪市北区浮田2-2-3 TEL: 6371-9921(代)
行岡病院 <http://www.yukioka.or.jp/> 行岡学園 <http://www.yukioka.ac.jp/>



医師のプロ魂

副院長 古満 豊

私が行岡病院へ入職したのは、平成2年の9月、丁度一昔の12年前で、当時と比べると今日の病院を取り巻く環境は大きく変わってきている。

当時、入院患者の皆様の数は1日平均400人近く、私自身も30人前後の方々と診ていた。現在と比べて遥かに多い。しかし、1旦入院すれば1ヶ月間といわれた時代で、在院日数も気にしなくて良かったが、半数以上の方がいわゆる社会的入院であり、現在の急性期の患者の皆様と比べると治療の度合いが低かった。逆に言えば腕をふるう機会は今より多くなかったのである。その分救急病院としての当直の時は、今日は何が出来るかと胸をふくらませたものである。プロ魂というか、プロ野球のピッチャーがマウンドで投げたくてたまらないように、医師は治療をしたくてたまらないものである。

今でも、当直につくと、せっかく当直しているのだから、何とかたくさんの方に来ていただいて治療が出来るようにと待ちかまえている。

4月から診療報酬がマイナス改訂となったことを始め、病院を取り巻く環境はとみに厳しくなっている。病院間の競争も激しくなっ

た。一方、患者の皆様を支える方法は多様化し、単に病気に対峙するだけではなく、心も含めた全人格に対応し、近隣の先生方との連携も深め、総合的に取り組むことが必要となってきた。その中で、不幸にも病にかかれた方が行岡病院に救いを求めて来られたとき、その思いに応えるために、医師としては、やはりそれぞれの得意分野の腕をより一層磨くのがプロフェッショナルとしての本分であろう。

12年前と比べると医師の役割が複雑になった現在、地域医療のレベルアップに貢献できることを願いつつ、医師としてのプロ魂を発揮したいと日々挑戦している今日この頃である。



医聖 ヒポクラテス

インターネット (Antiqua Medicina : Hippocrates) より引用

「見せる」高度眼科診療を目指して

眼科部長 三宮欣彦

当科外来は8月にリウマチ科横に新装、移転致しました。デジタル画像ファイリングシステム（阪大および大阪府眼科医会理事、森下清文先生の医院を参考に構築）、ウェーブフロントアナライザー、眼底造影検査機器、各種レーザー機器、視野計などの最新の設備を誇るもので、精緻な診断に基づいた白内障・緑内障手術から網膜硝子体手術まで網羅する高度眼科診療と、患者様にわかりやすい説明・啓蒙の融合を当科の診療方針に掲げています。細隙灯顕微鏡、眼底造影検査などの所見はコンピューターからリアルタイムにモニターを用いて患者様への説明が可能で、「見せる」



医療でインフォームドコンセントに威力を発揮します。また手術室には新たに硝子体手術器械等が配備されました。

外来スタッフは私と高田敦子、志賀サナエ（顧問）の医師3名、視能訓練士2名、看護師2



名で、月曜日から土曜日(担当医制)まで診療を行っており、眼底造影検査、視野検査、眼鏡処方などの特殊検査やレーザー治療が可能であるのが特徴です。手術日は定例の水曜日の他、救急病院である当院の特徴を活かして緊急手術を随時行うことが出来る体制をとっています。

新診療体制の樹立に多大なご支援をいただいた行岡正雄理事長はじめ病院スタッフの皆様に誌面を借りて感謝申し上げます。最新設備と少数精鋭の特徴を活かし、全く新しい眼科診療を目指しますので宜しく御願い申し上げます。

【自己紹介】

東大工学部（医用精密講座）、阪大医学部（学士入学）を卒業後、阪大病院、多根記念眼科病院、関西労災病院、国立大阪病院、アメリカ留学を経て、淀川キリスト教病院から本年6月より現職。38歳。眼科医の妻との間に1歳10ヶ月の一女。

回復期リハビリテーション病棟開設

師長 岩佐加織

回復期リハビリテーション病棟とは、脳血管疾患や骨折などの手術後の患者様を対象に、早期家庭復帰、社会復帰を目標として集中的にリハビリを行う為の病棟です。

当院では、平成14年8月1日より回復期リハビリテーションの承認を受け、56床で運営をスタートしました。専従医師1名、専従PT2名、OT1名をはじめとするスタッフと共にチーム医療を実践し、個々の患者様の目標を設定し、状態に応じたアプローチが出来る様、努力しています。当病棟の看護方式も、患者様の個性を重視し、チームナーシングをベースに、患者様一人ひとりに担当の看護師を設ける受け持ち制を取り入れています。

当病棟では、生活すべてがリハビリテーションと位置づけ、看護師や、ヘルパーがADLの向上の為、積極的に病棟内リハビリに努めています。また、ラジオ体操や、ビーチボール、



オセロなど遊びを通じて、楽しみながら機能向上が図れるよう工夫しています。

まだ、8月に立ち上がったばかりの新病棟で、スタッフ丸となって頑張っています。試行錯誤の毎日ですが、日々変化し、良くなっていける患者様の姿が私達スタッフの喜びでもあります。

一人でも多くの患者様が、一日も早く家庭に、そして社会に復帰できる事を願って、より充実した病棟体制を目指します。

【対象となる方】

- 脳血管疾患、脊髄損傷の3ヶ月以内の方
- 大腿骨頸部、下肢や骨盤等の骨折の発症後3ヶ月以内の方
- 外科手術、肺炎等の治療時の安静によって生じた、廃用症候群を有しており、手術後又は発症後3ヶ月以内の方
- その他、当病棟での療養が必要と診断された方



ナイチンゲール像

看護第1学科
第一期卒業生
井上 智恵

私達一期生が卒業してようやく四カ月が過ぎようとしています。

入職直後は学生時代には目にも止めなかった書類の処理や、24時間の流れの中での自己の役割と責任に戸惑い、又初めての患者様に行う注射等の技術にとっても緊張し、「これから本当にこの仕事を続けていけるのだろうか」と不安で一杯になりました。そんな時にいつも思い出されるのは、大野先生始め諸先生方が私達に投げ

かけて下さった言葉の一つ一つでした。特に担当であった今は亡き仲島千佳子先生は、普段の生活態度や社会人としての常識の大切さ、どんな看護観をもっているかが看護師としていかに大切であるかを、毎日の生活の中で折に触れ指導して下さいました。実際に看護師となった今、諸先生方の言葉がいかに真実であったかを思い知らされています。今はようやく生活のリズムもつかめ、専門職として一人前とはいえないもののよちよち歩きから一人歩きへと歩みだし、患者様との関係を築き始めています。

先日、久しぶりに母校を訪ねる機会がありました。今年の新入生（4期生）には男性8名を含め社会人が多数入学されているとのこと。こういった現象は看護師に対する社会的評価の向上の一つだと考えられ、身の引き締まる思いがします。その一年生の教室の入り口には、私達が卒業記念にと贈らせていただいたナイチンゲール像が行岡正雄理事長先生・学園のご好意により立派なケースに納められ、凛とした眼差しをこちらに向けていました。困ったとき、悩んだときに暖かく迎えてもらえる場所、嬉しい事があっ

たときに報告出来る先生方がいる。そんな母校があることのありがたさと心強さを改めて実感できました。今後第一期生として後輩を迎えられるよう役割と責任を果たしていきたいと考えます。

